島根大学附属図書館　医学図書館ニュース

インフォ・アクセス

Vol.17 No.3　　2021 年3月1日発行

丸山 理留敬 医学図書館長 4年間ありがとうございました

2017年4月に医学図書館長に就任された丸山理留敬医学図書館長（医学部病理学講座器官病理学教授）は、2021年3月31日をもって任期満了となります。

丸山教授は、図書館の活動を常に温かく見守ってくださりながら、図書館のこれからについてともに悩み考えてくださいました。

退任に際して、丸山教授からご挨拶をいただきましたので掲載させていただきます。

目 次

丸山 理留敬 医学図書館長 4年間ありがとうございました	1
医学図書館の動き ・附属図書館運営会議が開催されました	2
3月のブックコンパス 「忙殺医学生のための社会科学入門1 古典の名著を読んでみよう」	2

＜退任挨拶＞

4年前、電子ジャーナルに費やされている大学の予算がいくらかも知らずに引き受けたこの役目ですが、館長としての私の仕事は、思いも寄らぬ不審者への対応から始まりました。しかし図書館の皆様のおかげで、迅速に事を収めることができたことが懐かしく思い出されます。以来、本や雑誌の管理、利用者への対応、あるいは電子ジャーナルの件にしても、全て皆様の努力のおかげで何とか2期、無事に終えることができました。深く御礼申し上げます。設備などいろいろ改善すべき点があったことは承知しています。しかし専任ではないため時間をさけず、ほとんど職員に任せきりで館長として充分な仕事ができなかったことが残念です。

以前は私も一利用者として、多くの方と同様な気持ちであったかもしれません。しかしいま図書館を利用する皆さんに是非理解して頂きたいのは，図書館はただ本や雑誌が置いてある場所で、図書館職員はその貸し出し業務だけを行っているのではないということです。例えば、本や雑誌は常に新しくなりますが、図書館のスペースは限られています。何を更新し何を新規購入し、どれを廃棄するかを限られた予算のなかで考えていかなくてはいけません。これは専門的知識を持った図書館員でないとできません。また、図書館のリソースを活用して大学職員の専門教育に寄与するのも重要な仕事です。本学とともに行う各種イベントの企画や準備もあります。さらに、近年は電子ジャーナルの購入経費が高騰し大きな問題になっていますが、大学の運営費交付金は減少してきています。したがって将来の購入計画を立てるために何度も教員が会議を行うのですが、そのために各大学等の情報を収集し、会議資料を作成することも図書館員の仕事です。これがなければ計画は前に進みません。因みに、電子ジャーナルの経費は現在島根大学だけで1億円を超えています。利用者の皆さんの目に入る貸し出し業務や閲覧室の管理に関してさえ、昨年後半から今年度に関して言えばコロナ対策にかなりの時間をとられています。

図書館は大学ならそこにあって当たり前である。確かにそうかもしれません。しかしその中では、少ない人員ですが誇りを持った職員によって多くの専門的な業務が行われています。加えて、職員は利用者の皆さんの利便性を最重要課題と考えて勤務していることに、敬意を払って頂ければ幸いです。そしてこれからも、閲覧や勉強の際にはルールを守って図書館を利用されることをお願い致します。

４年間、職員と利用者の皆さんのご協力に心より感謝申し上げます。

医学図書館長　丸山　理留敬

学内でお会いした際には、いつも「変わりありませんか？」「大丈夫ですか？」等お声掛けくださり、その優しさが職員にとって日々の業務の励みとなっていました。本当にありがとうございました。

医学図書館の動き

附属図書館運営会議が開催されました

日時：2021年2月22日（月）　10：30～12：00

附属図書館運営会議が開催され、以下の議題が協議されました。

〈議題〉1. 第8期学術情報基盤整備計画（案）について
　　2. 次期附属図書館長及び医学図書館長候補者の選出について
　　3. 附属図書館規則の一部改正について

〈報告〉1. 令和2（2020）年度第1回本館運営会議報告　　他5件

3月のブックコンパス

忙殺医学生のための社会科学入門1
古典の名著を読んでみよう

【企画者からのコメント】（企画者：学生）

私は今回の新型コロナウィルスの流行で、医学がいかに社会の安全と安心に寄与するかを改めて確認したと同時に、医師をはじめとする医療従事者に、いわゆる文系に分類されるような人文社会科学的な教養が大切であることを痛感しました。

医師は医学の専門家として、感染症に関する一般的な感染対策などの知識を有し、感染症の専門医であれば、ウィルスに関して踏み込んだ分析ができたでしょう。しかし、そのような医学的に正しい情報は、どれほど世論や政策にインプットされ、正確なアウトプットを受けたでしょうか？政府は初動で組織論的な政策決定のミスを犯した結果ピントがずれた対応を続けているように映り、マスコミは科学的根拠の無いセンセーショナルな“噂”を垂れ流すことで視聴率を得ることに終始し、自称「感染症に詳しい」コメンテーターは自身の発言に十分な責任を負わずに適当な批評を加える働く無能と化し、SNSではデマが跋扈してトイレットペーパーなどの商品が不当に買い占められて品薄となりました。

医師をはじめとする医療従事者は、このような感染症に伴うパニックに対して、十分に適切な対応が取れていたのでしょうか？政府や一般世論に対する情報のインプットは十分であったのでしょうか？政策の決定や政策の執行の過程や組織の動き方などを、どの程度理解できていたのでしょうか？医療従事者が考える安全の概念と一般世論が抱く不安との間の乖離が、適切に理解されていたのでしょうか？

私は人間や社会を仕事の相手にする医療従事者こそ、人文社会科学の教養が必要であると痛感しています。

しかし、カリキュラムの変更によって教養を得る時間はいよいよ少なくなり、また専門科目の勉強に忙しい医学生は、教養を得るために本を読む時間を取ることが難しいのが現状です。

そこで、防衛大学校と慶應義塾大学で国際政治学、安全保障政策を研究した経験を持つ私が、学部１年生のときに薦められて読了した本の中から、更に厳選してご紹介しようと思います。今回は、長い年月に耐えた良書である古典作品を中心にご紹介します。ぜひ、手にとっていただければと思います。

◆道徳感情論（アダム・スミス）
◆すばらしい新世界（オルダス・ハクスリー）
◆社会契約論（ジャン=ジャック・ルソー）
◆日本型「教養」の運命：歴史社会学的考察（筒井清忠）
◆正義論（ジョン・ロールズ）
◆科学の解釈学（野家啓一）
◆職業としての政治（マックス・ウェーバー）
◆動物農場（ジョージ・オーウェル）

コメントから企画者の熱意が伝わってきますね。
他にも多数展示予定です。ぜひご利用ください。

編集後記

今年度もあと一ヶ月です。今年度はとにかくCOVID-19 に振り回された一年でした。図書館も長期休館を余儀なくされ、利用者の皆様には大変ご不便をおかけしました。現在も“通常通り”にまでは戻すことができておらず、来年度も当分はCOVID-19 に振り回されそうです。しかもあまりに毎日コロコロ状況が変わるため、“通常通り”がどのような状態だったのか忘れてしまいそうです。覚えているうちに元に戻りますように…そんなことを願いながら業務を行う今日この頃です。(M.Y.)

発行日　2021（令和3）年3月1日
発行者　島根大学附属図書館
　　医学図書館
〒693-8501 出雲市塩冶町89-1
TEL: 0853-20-2094
FAX: 0853-20-2095